



関西大学

大阪都市遺産研究センター

Newsletter

No. 10 2013 年 11 月 15 日

目次

第 5 回大阪都市遺産フォーラム「芝居町道頓堀の景観復元をめざして」開催	1
写真展「三村幸一が撮った大阪の祭り」開催	2
平成 25 年度第 1 回研究例会	3
平成 25 年度第 2 回研究例会	3
織田作之助と大大阪展	4
オーストリア「豊臣期大坂図屏風」調査	4

第 5 回大阪都市遺産フォーラム「芝居町道頓堀の景観復元をめざして」開催

第 5 回大阪都市遺産フォーラム「芝居町道頓堀の景観復元をめざして」が、6 月 26 日に関西大学千里山キャンパス尚文館 AV 大ホールで開催された。今回のフォーラムでは、センターが入手した「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」と、芝居町道頓堀の景観復元についての現在までの成果を公開することがテーマとなった。

本学の前田裕副学長による開会あいさつの後、第 1 部「道頓堀いま・むかし」では、今井徹氏（道頓堀商店会会長）から道頓堀で暖簾を守る「道頓堀今井」の西洋楽器店からのあゆみが、鳥居弘昌氏（千日山弘昌寺住職）から道頓堀に接する千日前がかつては信仰の場であったことが紹介された。第 2 部「芝居町道頓堀の景観復元への試み」では、センターの橋寺知子研究員（本学環境都市工学部准教授）・林武文研究員（本学総合情報学部教授）からこれまでの成果が報告された。橋寺研究員の「中村儀右衛門資料の概要と劇場建築復元への試み―角座―」では、多様な種類からなる中村儀右衛門資料のうち、設計図や仕様書などの建築関係の資料についての概要とその意義が紹介され、今年 3 月に中村儀右衛門資料をもとに制作された角座復元模型の試作品についても報告された。林研究員の「大正期道頓堀の CG 復元―浜側の復元とインタラクティブコンテンツの制作―」では、これまでは芝居側と呼ばれる道頓堀の通りに焦点をあて

て CG による復元が進められてきたが、新たに制作された道頓堀川から芝居町に至る浜側の動画 CG の制作過程や CG による景観復元にあたっての苦労話などが披露され、浜側 CG が公開されたほか、林研究員の指導の下で、本学総合情報学研究科の大学院生が制作を進めている「大正期の道頓堀バーチャルツアーコンテンツ」、携帯端末で大正期の道頓堀を見ることが出来る「パノラマ画像を用いたスマートフォンアプリの開発」について、大学院生の江草敬俊さん・大原尚也さんから報告され、デモンストレーションが行われた。

第 3 部のパネルディスカッション「芝居町道頓堀の景観復元をめざして」では、パネラーに、今井氏・鳥居氏のほか、まち歩きナビゲーターとして大阪の文化資源





に精通されている栗本智代氏（(株)大阪ガス エネルギー・文化研究所首席研究員）と高橋隆博研究員（本学文学部教授）を迎えて進められた。栗本氏からこれまでのセンターの取り組みについての感想が述べられたのち、議論に移り、これからの道頓堀の町づくりにおいて「芝居町」が核となるべきことが提唱され、パネラーからはさまざまなアイデアが出された。当日は朝から激しい雨が降り続くあいにくの空模様であったが、141名の参加者が熱心に聞き入っておられた。

また、フォーラムに関連して企画展「芝居町道頓堀の景観復元をめざして一新発見『大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料』一」が、6月26日から7月3日まで、センター1階の大阪都市遺産セミナー室で開催された。劇場の建絵図や設計図（複製）、舞台背景画デッサンである「大道具帳」（原本）、角座復元模型の試作品のほか、センター所蔵の「道頓堀・千日前ジオラマ」が展示され、会期中248名の方々が見学に訪れた。

なお、芝居町道頓堀の景観復元については、2012年度に引き続き、サントリー文化財団による2013年度地域文化に関するグループ研究助成に「芝居町道頓堀の復元的研究と都市再生～CGによる地域文化景観の復元～」(研究代表者：藪田 貴)が採択された。これまで歴史学・建築学・情報学から芝居町の景観復元に取り組んできたが、今後は日本演劇の分野からも研究を進めていくことになる。

(特別任用研究員 櫻木 潤)

写真展「三村幸一が撮った大阪の祭り」開催

2013年7月10日から15日まで、天神筋橋3丁目商店街内にある関西大学リサーチアトリエにおいて、関西大学大阪都市遺産研究センターと大阪歴史博物館の主催、関西大学社会的信頼システム創生センターと共催で、写真展「三村幸一が撮った大阪の祭り—大阪歴史博物館所蔵写真から—」を開催した。

三村幸一は、1903(明治36)年生まれの大阪を中心に活動した写真家で、道頓堀の歌舞伎や芝居、能・狂言などの写真を多数撮影した。なかでも文楽は、戦前から50年以上にわたって撮影を続け、公演パンフレットや解説書に多数の写真が使われた。さらに三村は近畿民俗学会に所属し、様々な研究者に同行して全国各地の祭りや民俗芸能も撮影しており、神楽面や化粧地蔵は写真集として出版されている。

センターでは、三村の没後に遺族から写真の寄贈を受けた大阪歴史博物館と協力し、1950年代～60年代の祭りや民俗行事を撮影したネガフィルムのデジタル化を進めている。その成果として、今回の写真展では大阪の祭りに焦点をあて、リサーチアトリエがある天神筋橋商店街が写った天神祭の写真をはじめ、住吉祭、能勢の民俗行事など、28枚の白黒写真を展示した。

7月13日(土)には黒田一充研究員(本学文学部教授)による展示解説が行われ、撮影当時の天神祭や住吉祭と

現在の比較や、現在は行われなくなった能勢のコムシの行事など、展示写真とその前後に撮影された写真も含めて紹介された。

期間中には展示写真の人気投票が行われ、来場者には気に入った写真の下に設けられた台紙にシールを貼って投票してもらった。投票総数314票のうち58票を獲得して、「天神祭・船渡御(1954年)」が一位となった。期間中には6日間で931名もの人々が会場を訪れ、活気ある祭りの様子や当時の町並みを写した写真を楽しんでいただいた。

センターでは今後も引き続き写真のデジタル化を進め、その成果を活用していく予定である。

(R.A. 吉野 なつこ)



平成 25 年度第 1 回研究例会

6月13日(木)、平成25年度の第1回研究例会が開催された。この研究例会は、可視化チームの研究成果報告を主とするものであった。可視化プロジェクト主管の林研究員から活動の概要が紹介されたのち、道頓堀の可視化プロジェクトに関して、本学総合情報学研究科の大原直也氏と江草敬俊氏が、スマートフォンアプリの開発やインタラクティブCGコンテンツについての報告を行った。続いて、関西大学非常勤講師の水田憲志氏が、「地形図・GIS・空中写真からみた水都大阪の景観変遷」と題して、地形図と空中写真によって道頓堀の景観変遷を

二次元的に表現する試みについての報告を行った。最後に、井浦研究員(本学総合情報学部准教授)と内田特任研究員が『豊臣期大坂図屏風』のデジタルコンテンツ制作」と題して、これまでの「豊臣期大坂図屏風」のデジタル化についての成果を報告した。

例会終了後、センターの高槻分室で、大原氏・江草氏の開発したコンテンツについてのデモンストレーションが行われ、改良すべき点などが議論された。

(特別任用研究員 内田 吉哉)



平成 25 年度第 2 回研究例会

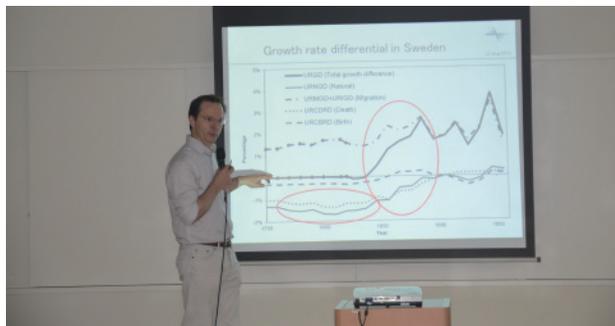
平成25年度の第2回研究例会が、平成25年8月22日に開催された。今回は、サブテーマB「商都大阪」班の研究に関連し、ベルギーのルーバン・カトリック大学(UCL)人口社会研究所のPhilippe Bocquier(フィリップ・ボキエ)教授が「What transition comes first? Urban and demographic transitions in comparative perspective (どんな転換が最初に現れるのか?—比較の視点からみた人口と都市の転換)」と題して報告された。

近代移行期の都市については、死亡率低下が都市化をもたらしたというティム・ダイソンの説明図式が有力とされている。これに対しボキエ教授は19世紀のスウェー

デンとベルギーのデータを精査し、初期の都市化においては地域間の経済格差を背景とする移動の役割が、きわめて重要であることを明らかにした。これは、1970年代にゼリンスキーが主張した人口動態転換理論にあらためて光をあてるものであり、工業化と都市化の関連を深める議論に再検討を迫るものといえる。

報告後、フロアからはスウェーデンとベルギーのパターンの違いなどをめぐって活発な議論があり、さらに、「商都大阪」班が進めている明治・大正期大阪との比較研究の可能性にも言及がなされた。

(研究員 浜野 潔)



織田作之助と大大阪展

平成 25 年、大阪を代表する作家織田作之助は生誕百年を迎えた。そこで、生誕百年記念事業の一貫として、本センター共催で、同年 9 月 25 日から 10 月 18 日まで、大阪歴史博物館にて「織田作之助と大大阪展」が開催されることになった。この展示会は、委員長難波利三代表他 30 名で構成される織田作之助生誕百年記念推進準備委員会が行ったもので、藪田貫センター長（本学文学部教授）と、増田周子研究員（本学文学部教授）も委員に加わり、総力をあげておこなった企画展であった。

織田の代表作「六白金星」の戦前版原稿、「木の都」に登場する矢野名曲堂のモデル：今井楽器店に飾られていた山田伸吉絵画「道頓堀今昔」など、センター所蔵の織田ゆかりの貴重な資料の数々が出展された。さらに会場では、センターが独自に製作した道頓堀五座を復元したグラフィック映像の DVD を上映され、織田の生きた時代の大阪の都市景観を演出し、展示会を盛り上げた。

本年 3 月には、センターから『織田作之助と大阪』

が出版され、「六白金星」他、関西大学所蔵の織田作品の研究結果が公表された。また、センターは、同年 3 月『大阪の小説家と映画』も刊行し、織田の全映画作品について紹介した。「織田作之助と大大阪展」は、まさにセンターの研究と直結した展示企画であった。この展示会では、関西大学図書館所蔵の織田の肉筆原稿や、高津中学時代の卒業アルバムに加え、織田禎子さん所蔵の「夫婦善哉」直筆原稿三種や、「続・夫婦善哉」の執筆時期が特定される昭和 16 年の『日記』など、初公開の新資料も展示され、話題を呼んだ。昭和 16 年 11 月 20 日の『日記』には、『関西大学新聞』に寄稿したことが記されていたが、確かに同年 11 月 30 日の同新聞（第 106 号）に、全集未収録資料「関西の文学運動」が掲載されていた。

センターでは、これらの貴重な新資料を現在検討し、織田とその周辺から、大阪の都市遺産を今一度見直す研究に邁進している。（研究員 増田 周子）

オーストリア「豊臣期大坂図屏風」調査

9 月 20 日～ 27 日にかけて、オーストリアにて「豊臣期大坂図屏風」の調査を行った。滞在地はウィーンとグラーツで、ウィーンでは屏風がオーストリアにわたった 17～18 世紀の、現地における文化と美術の状況を調査するため、美術史博物館とシェーンブルン宮殿を視察した。

グラーツでは、エッゲンベルク城にて「豊臣期大坂図屏風」の調査を行った。またエッゲンベルク城のスタッフと、屏風の研究進捗に関するミーティングを持った。

「豊臣期大坂図屏風」は、エッゲンベルク城に所蔵される以前、18 世紀中頃まではグラーツ市内のエッゲンベルク家の屋敷にあった。屋敷は 2011 年からシュタイアマルク州の「宮殿ミュージアム」として公開されている。グラーツにおける「豊臣期大坂図屏風」の所蔵状況を調査するため、宮殿ミュージアムの視察を行った。

グラーツはオーストリア南東部に位置し、オスマン帝国と国境を接する防衛拠点でもあった。そのための武器保存庫が、現在は武器博物館として公開されている。グラーツの歴史的背景を調査するため、武器博物館の視察を行った。（特別任用研究員 内田 吉哉）



関西大学大阪都市遺産研究センター NewsLetter No. 10 2013 年 11 月 15 日発行

発行・編集 関西大学大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06-6368-0095 FAX 06-6368-0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/osaka-toshi/>

mail osaka-toshi@ml.kandai.jp

